

入選

心配しないでね、おばあちゃん

福井県 森田小学校

2年 辻 七海

わたしには、おばあちゃんが一人います。お父さん方のおじいちゃんは、わたしが生まれるずっと前、お母さん方のおじいちゃんとお父さん方のおばあちゃんは、わたしがまだ小さいときに亡くなりました。だから、わたしにいてるのはお母さん方のおばあちゃん、ただ一人だけです。

わたしのおばあちゃんは、しん体にしょうがいがあり、みんなにめいわくをかけたくないという理由で、かいごせつで生活しています。学校の友だちや、近所の友だちは、おじいちゃんやおばあちゃんといっしょにくらしている子が多いので、わたしもおばあちゃんといっしょにくらしたいなど、ときどきうらやましい気持ちになります。

でもそれはかなわないので、わたしはおばあちゃんと、手紙のやりとりをしたり、電話で話したりして、おたがいに「今こんなふうに住んでいるよ。」と、ほう告しあっています。

おばあちゃんは、左がわの体が全部動かないので、きき手だった左手だけではなく、右手でも手紙を書いているそうで、正直に言うと字がしっかりしていないので、とても読みづらいです。でも私は、読みづらいことは気にならないけれど、自分でその手紙が読めないことがくやしく、しかたがないのでいつもお母さんに読んでもらいます。

「どうしてお母さんは、そんなにすらすらおばあちゃんの手紙を読めるの？」と、お母さんにしつ問すると、「わたしが小さいときに、おばあちゃんの左の体が動かなくなってしまって、おばあちゃんが右手で文字を書くれんしゅうをするのもずっと見ていたし、がんばって文字を読むとくももしていたからだよ。」と、教えてくれました。

「じゃあ、私もがんばったら、おばあちゃんの字読めるようになるかな？」と、お母さんに聞くと、「これからお手紙をつづけていたら、きっと読めるようになるよ！」と、言ってくれたので、おばあちゃんとたくさんお手紙こうかんでけるといいな、と思いました。

私が「おばあちゃんの手紙を読めなくてくやしい。」と思っていたとき、おばあちゃんは、「ななちゃんが読めるような、きれいな字を書けなくてもうしわけない。」と、お母さんに電話をしていたそうで、おばあちゃんは、「きれいな字を書けるように、もっとリハビリをがんばる。」と、言っていたそうです。

わたしはそのとき、読めない私が「ごめんね」という気持ちなのに、おばあちゃんはすごくやさしいなと思いました。

うまくしゃべることができないことも、わたしをこわがらせているんじゃないかと心配しているおばあちゃん。夏休みに会いに行ったとき、「今のままのおばあちゃんが大好きだよ。」と、伝えたいです。